

シリーズ 言語と人々

ドイツ人とドイツ語



法学部
加藤 克佳

ツ人と接して感じたことに触れてみたいと思う。

ドイツ人は、小さい頃から、自分の意見を待ちそれをきちんと表現することを教育される。いわゆるインテリや学生だけでなく、どの人達もそういう印象を抱かせる。国民性といえるほど彼らは議論好きであり、各種の集会では「我が思うところ言わずして何のための集まりか」ということで、延々と議論が続く。知人との会食の場でも同様であり、言葉のハンディもあって本当にへとへとに疲れたものである。もちろん、大学の講義やゼミでの学生達の発言もきわめて活発である。日本では「沈黙は金、雄弁は銀」とか「十を知って一を言え」などといわれるが、ドイツでは「雄弁こそ金」であり「何も言わない奴は言うべきことが何も頭の中にないのだ」といわんばかりであって、極端な場合は「一つしか知らないのに十を言っている」と感じられることすらある。これは、欧米一般にいえることだが「黙っていてもわかってくれるのではないか」という日本人的感覚とはまったく異なる。善し悪しは別として、ドイツでは、自分の意見をきちんと主張しなければ自分を正しく理解してもらえないのである。

3 新入生の皆さんの中には、ドイツ語を選択した人も少なくないであろう。ドイツ語は、発音は比較的易しいが、どちらかといえばきつい感じのする言葉であり、文法も複雑な所が多い。そして、大変「論理的」な言語であるように思われる。ある概念や感覚を一つの単語や言回しで表現するのにも適していることが多い。この「論理的(logisch)」という言い方は日常的になっていて、たとえば会話の相づちの1つにDas ist logisch. というのがある。これは、直訳すれば「それは論理的だ」となるが、実際には「それはそうですね」くらいの軽い意味である。このように、日常会話にも「論理」が出てくるところがいかにドイツ的である。これに対して、日本語は大変曖昧な言語であるといわれている。むしろ、ドイツ語にはなく日本語だけにしかない単語や表現も少なくないし、日本語が繊細な言葉であることは間違いない。しかし、欧米語と比較すると、論理性で劣る面があることは否定できないように

1 私は、1996年8月から約2年間、南ドイツ・バイエルン州の古都・アウクスブルクに居を構えて在外研究(いわゆる留学)を行った。その間の経験から、外国や外国語に関心のある新入生の皆さんに若干のエピソードを紹介したいと思う。なお、私は、語学の専門家ではない(専攻は法律の中の刑事法である)ので、言語学的には不正確・不適切なことを述べるおそれも大きいですが、それだけにかえて感じたことを率直に表明できるかもしれない。

2 「日本人は外国語(英語)の読み書きは得意だが、会話は苦手だ」といわれる。これは、当たっている面と当たっていない点があるように思われる。たしかに、英語は中学校以来何年も勉強するので、大学に入る頃にはある程度読めるようになる。しかし、読めるといってもせいぜい現地の中学生レベルであるし、書く力はそれよりも劣る。一方、会話は、いわれるように実用に耐えないのが普通である。原因はいろいろ考えられるが、そのための練習の機会が少ないことは明らかであろう。また、話す方は何とかなっても、聞くのは大変難しい。これは、外国語を耳からでなく目から学んでいることに一因があるといえよう。しかし、これらはひとまず脇に除けておき、ここでは、自分の意見・考えの表現方法についてドイ

思われる。

これに先に述べた自己主張の仕方とを重ね合わせると、単に外国語だからということでない外国語の難しさの原因と外国語習得の鍵らしきものが浮かび上がってくるのではないかと。つまり、自分のいいたいことを論理的に表現する訓練ができていないこと（日本語で！）が、単語や文法の知識不足にも増して外国語の壁となっているように思われるのである。時折、英会話のできる若者の中には単にファッションとして英語を話す人が多く、発音や挨拶程度はうまいがすぐに話題が尽きてしまうということを知ることがある。流暢な発音や如才なさも大切だが、中身も劣らず大事だということになる。

4 そうはいても、形式面の習得すら日本人には難事である。日本人が欧米語の習得に大きなハンディを負っていることは疑いない。写真（左から7人目が筆者）は、在外研究先の1つであるヘルマン教授（アウクスブルク大学）のゼミナールでスイス南西部・シオンに合宿に出かけたときのものである。これは、アメリカのフィーニー教授（カリフォルニア大学）とともにドイツとアメリカの刑事法を比較するという内容であり、報告も討論も全部英語で行われた。ヘルマン教授によれば、参加した学生は英語を比較的好く勉強しているのでうまいとのことであったが、それにしてもドイツの大学生の英語力には驚嘆させられたのである。そこで、彼らに英語の勉強法を聞いてみると、「ギムナジウム（日本の中学・高校に相当す

る）で何年も勉強したから」といわれ言葉に詰まってしまった。もしそれだけだとすると、日本の大学生も英語を自由に操れなければならないはずだからである。しかし、学生の中には「英語はドイツ語の親戚だからなんとかなるよ」という答えに接し、少々安心した。そうだ、やはりドイツ人にとっての英語は日本人にとってのそれとは違うのだ、と。たしかに、単語や文法など、同じゲルマン語として似ている所は大変多い。それとともに、自己主張を当然とする彼らの気質や、英米系を含む外国人に接する機会の多いヨーロッパの環境が、外国語の壁を乗り越えるのに有利に作用していると感じられるのである。

そんなこともあってか、ドイツの学生の中には5、6か国語話せる者すらいた。最初は驚いたが、納得できる面もあって次第にあまり驚かなくなった。私が少し通った外国人のためのドイツ語学校でも、文法はともかく、ドイツ語（らしきもの）をうまく話す能力はヨーロッパ出身の方が遙かに上であった。何といっても言語を含む文化や環境が似ているのである。スイスには4つの国語があるが、そんなことは日本では考えられないであろう。ただし、この点は必ずしも欧米語間だけに限らないようである。私の妻にドイツ語を教えてくれた女子学生は短期間の勉強で日本語をかなり習得し、その後東京に1年間留学してますます日本語が上手になったが、彼女は、あるいは外国語習得の本質的な勘所を体得していたのかもしれない。

むろん、ドイツ人だから当然英語に苦労しないということはないようで、一般市民の多くは英語をはじめ外国語が苦手である。また、ドイツ人学生の中には英米に留学したり旅行で英語圏に出かけたりする者が多く語学学校も少なくないことからすると、外国語習得の苦労は彼らにもあることは間違いないであろう。そうはいても、日本語と欧米語との違いが大きいことは歴然としている。これからますます国際交流が活発になることを思うと、言葉の障壁は少しでも小さくする必要がある。そのため、早期から英語教育を行うことが提唱されており、それはそれで有意義である

